

〈比較する主体〉としての植民地帝国 — 越境する英領インド教育政策批判と東郷實

水谷 智

本稿はヨーロッパと日本の植民地主義を統一的分析枠組みのなかで再検討する共同研究において着想されたものであり、筆者の専門であるイギリス帝国史を比較の視点から捉えなおす取り組みの一環である。比較を念頭においた植民地主義研究にはいくつかの方向性が考えられるが、ここでは、所与の帝国の植民地政策が他の帝国によっていかに比較参照されたかを明らかにし、それによって〈比較すること〉そのものの歴史性を追究していく。そのための題材として、植民地台湾の高級官僚をつとめたのち、『植民地政策と民族心理』（1925年）を著した東郷實の植民地政策論をとりあげる。イギリスの帝国の植民地統治が帝国日本の植民地主義者によってどう見られていたのか、その比較の動機と論理を検討していくが、その際に着目するのが、イギリス統治のなかでも、特に1830年代半ば以降のインドにおける教育政策を東郷がどう論じたか、また、それが他の帝国（特にフランス）の植民地政策論者の見解とどう関係していたのか、である。英領インド教育政策という特定の統治策に関する言説が、各々の帝国の枠をこえて比較の対象とされていく、比較言説の越境性や重層性を明らかにしていく。またそれによって、現代の植民地主義研究者が複数の植民地帝国を共同研究するための一アプローチとして〈比較の内在批判〉の可能性を提示したい。

1. 〈比較の内在批判〉に向けて

本稿はヨーロッパと日本の植民地主義を統一的分析枠組みのなかで再検討する共同研究¹⁾において着想されたものであり、筆者の専門であるイギリス帝国史を比較の視点から捉えなおす取り組みの一環である²⁾。イギリス、フランス、オランダなどのヨーロッパ帝国国家による植民地主義と帝国日本によるものとを同時に検討するにあたっての研究パラダイムを構築するのが共同研究の目的であるが、ここではある帝国の植民地政策が他の帝国によっていかに比較参照されたかをとりあげ、〈比較する〉という行為自体を歴史学の対象として主題化する植民地研究の可能性を探ってみたい。具体的には、植民地台湾の高級官僚をつとめたのち、『植民地政策と民族心理』（1925年）³⁾を著した東

郷實の植民地政策論⁴⁾をとりあげ、そこでイギリスの植民地政策が日本や他の帝国国家のものとの関係でどう論じられているのか、その比較の動機と論理を中心に検討していく⁵⁾。『植民地政策と民族心理』は、参照される文献のほとんどすべてが欧文のしかも比較的新しいものである点で際立っており、欧米植民地主義を参照する比較言説の軌跡を辿るには格好の研究対象である。また、「民族心理学」という理論を前面に押し出している点でも、比較の論理を探りやすい利点がある⁶⁾。一方、この本の日本の植民地政策（論）への影響の歴史学的検証は極めて重要な課題であるが、それは今後の課題としたい。ここでは、共同研究に従事するイギリス帝国史研究者の立場から、東郷の「民族心理学」のなかでイギリスの植民地主義がどう議論されたかを論じることによって、植民地主義における比較の歴史的意味合いを掘り下げることに専念する。

イギリス帝国の植民地政策が帝国日本の論者にどう見られていたか⁷⁾は、イギリス帝国史研究をより国際的な見地から捉え直す一助となりうるし、またこうした視点からの研究がもし日本史、朝鮮史、台湾史などの帝国日本に直接関係する研究領域に何かしら還元するものを持ちうるとすれば、それは少なからぬ喜びである。しかしその一方で、比較がさまざまな困難を伴うこともまた事実であり、場合によってはネガティブな結果を招きうることに注意を払う必要がある。まず、比較を試みる限り、研究者は自分の専門外の領域に踏み込まざるをえず、その結果、どうしても議論が希薄になったり、初歩的な間違いを犯してしまう危険性が高まる。とりわけ言語の違いを乗り越えるのは容易ではなく、しばしば統一的な枠組みの構築を困難なものにしている⁸⁾。また、比較はしばしば安易な一般化を誘引し、例えば、「フランスや日本の植民地主義は『同化的』でイギリスやオランダのものはそうでない」、「白人が支配者でない日本の植民地主義は特殊であった」、また逆に「後発の帝国国家である日本の植民地主義はすべて模倣であった」、といったような紋切型の分類に囚らずも加担してしまうことになりかねない。さらに、こうしたステレタイプが「A国による支配はB国によるものよりもCであった」（Cには「寛容」、「暴力的」、「搾取的」などの一連の形容語がはいる）という政治的含蓄のある判断とも容易に結びついてしまうという点でも、比較研究が抱える問題は根深い⁹⁾。

こうした「比較の罫」¹⁰⁾はあらゆるところに潜んで研究者を悩ませており、筆者もそれから決して自由ではないが、本稿ではそれを承知であえて危うい領域に踏み込んでいきたい。筆者が強く影響を受けている歴史人類学者アン・ストーリーのいうように、我々が研究対象とする過去の帝国国家自身が他との比較を通して自己の植民地支配を正当化

したり、統治方針を策定／修正していたとすれば、比較は避けてとおることができない植民地研究の主題である¹¹⁾。比較は多くの畏をはらんでいるが、それを乗り越えていくには回避によってではなく一度踏み込むことによってそれを内在的に批判をしていく必要がある、今後の帝国史がポスト・コロニアル (post-colonial) であるだけでなく、ポスト・コンパラティブ (post-comparative) である必要性が増しているゆえんである。日本帝国史研究者の立場からこうした比較の問題を論じている駒込武の言葉を借りれば、現在求められているのは「帝国のはざま」から異なる植民地主義を同時に対象化する研究視座の確立であり、それによって欧米と日本による支配の双方を同時に批判することなのである¹²⁾。

〈比較の内在批判〉をめざす本稿は、帝国日本の植民地主義者である東郷實によってイギリス帝国の植民地主義がいかに論じられたかに着目することによって、統治にまつわる知識・技術の生成と伝播の越境的な性質を明るみに出すことを試みる。ただし、「イギリス」というナショナルな範疇を不用意に用いた分析は東郷の思想の理解に非建設的であるばかりか、〈国柄〉にまつわるステレオタイプを助長するような一般化を招き、それによって前述した「比較の畏」に自ら近づいてしまうことになるであろう。そこで、イギリス統治のなかでも、1830年代半ば以降のインドにおける教育政策という特定の政策に対する見解に焦点をあわせる。結論からいうと、東郷は批判的な見地からイギリスのこの教育政策に何度も言及した一日本の台湾・朝鮮支配の文脈で教育政策を策定するにあたって、決して模倣してはならない失策の典型として、彼は英領インド・モデルを提示したのである。注目されるのは、英領インド教育政策を教訓とすることはすでに一つの言説として存在しており、東郷がその影響を受けていたということである。フランスの植民地主義理論家のなかのある系統に属する人々がこれを強く唱えており、東郷の見解は彼らの延長線上に位置づけられると考えられる。つまり、この政策は、フランスという別の帝国の論者によって主題化されており、すでに間帝國的 (trans-imperial) な比較の対象となっていたのである。またその一方で、同じイギリス国内でも、インドでの教育政策には批判の声があった。その結果、例えば19世紀末の保護領エジプトでは、意識的にインドとは異なる教育政策がとられた。これは同一帝国内における間植民地的 (intra-imperial) な比較の軌跡を示唆していたが、東郷はそういった比較言説も積極的に援用しつつ『植民政策と民族心理』を執筆している。本稿は、東郷實の思想の全貌を明らかにするというよりは、むしろ英領インド教育政策批判にテーマを限定することにより、比較行為の入り組んだ、越境的な性格を考察ための一つの方

向性を示すことを目指すものである。

2. 「民族心理」の概念と東郷の比較論理

英領インドの教育政策が、なぜ、いかに東郷實によって比較の対象とされえたのか。ここでまず彼の議論の理論的枠組みを比較との関連において検討しておこう。

東郷は『植民地政策と民族心理』について、「本書研究の目的は、民族心理学上から異民族の統治策に研究を重ね、科学的立論の下に合理的植民地政策を案出し、以て我邦の植民地経営上の参考に資せんとするにある」¹³⁾と冒頭で明示している。〈有色〉の支配国である日本の植民地主義も決して例外化されえない普遍法則が存在し、さらに、「民族心理学」こそがそれを説明するに最も適したアプローチにほかならない、と彼は主張する。「民族心理学」は東郷が植民地政策を考察するための理論的枠組みとしてフランスの思想家ギュスターブ・ルボンからとってきた方法である。それをあえてここで要約すれば以下のようなようろう：人類社会は「心的組織」とよばれる固有の心理的特質を持つ多くの「民族」によって構成されている；こうした「心的組織」は「過去に於ける多年の遺伝に依って造られた、確固不変」(ルボン [東郷訳]) のものであり¹⁴⁾、各々の「民族」の言語・宗教・文化の基層として存在する¹⁵⁾。

ルボンの「民族心理」の概念は東郷の植民地政策論における比較の枠組みを理解する上でも決定的に重要である。まず、この概念は、日本人にはイギリス人と同じように支配者としての適性が備わっている、と東郷が主張することを可能にした。日本は他の植民地保有国のように白人国家ではなく、そのことが、人種概念に依拠する欧米の植民地政策論に基づいて日本人の支配者性を説明するのを困難にしていると東郷は考えていた。彼は以前から欧米の植民地政策論における人種概念の中心性を批判していたが¹⁶⁾、「民族心理」にしたがって、人類のヒエラルキーが「人種」ではなく「民族」を単位にして成り立っているとすれば、たとえ非白人であっても日本人が支配する側に立つことが説明できると考えたのである。日本人とイギリス人は「人種」においては確かに異なっているが、両者は「心的組織」における優越性において共通しており、支配する側の「民族」としてともに植民地統治に取り組んでいる、という比較可能性の論理が成り立ったのである。

次に、「民族心理」によって、それぞれの被支配者との関係の面でもイギリスと日本の植民地経験の比較可能性の主張が可能となった。一見、イギリス帝国における支配と

被支配の関係性は白人と非白人の「人種」的差異に依拠するものであり、支配者も被支配者も「人種」的には同一の帝国日本における支配原理とは異なる。つまり、イギリスによる植民地支配は「民族」によるものではないから、それを基にした日本のものとは比較が成り立たないと映る。だとすれば、たとえイギリスがインドにおける現地人教育政策においてすでに〈失敗〉していたとしても、それは「人種」型支配の問題であって、「民族」型の日本植民地主義には無関係なのではないか。東郷は、イギリスをはじめとする欧米の植民地支配との違いを強調するこのような思考傾向こそが、「我邦の朝鮮及台湾に対する民族関係が独特の地位にあるかの如く解し、且つ我日本民族が異民族同化上特殊の才能を有するが如く信ずる」という「独断的観察」につながっている、と批判する¹⁷⁾。そして、こうした日本支配特殊説が「独断的」であることは、イギリス人が同じ白人であるアイルランド人をも支配していたことを見れば明白である、と東郷は主張する。日本人が「人種」において同じでありながら「民族」において異なる台湾人や朝鮮人を支配しているのと同じように、イギリス人もアイルランド人を支配していたことを考えると、日本の支配に特殊なものはない。つまり、イギリス支配を含むあらゆる植民地主義において、支配者と被支配者の関係を最も根本的なレベルで決定づけているのは白人と非白人の「人種」的差異ではなく「民族的」差異ということになり、またその差異を最も根底的に決定づけたのは「心的組織」の固有性であると論じられたのである¹⁸⁾。この「心的組織」決定論にしたがえば、たとえ人種的に同一であり、文化的に同じ漢字圏に属していようと、日本人と朝鮮／台湾人も全く異なるということになり、両者のあいだに支配と従属の関係ができてそこに歴史的矛盾は存在しないことになる。こうして、イギリス支配と日本支配は根本的には同じ近代植民地主義であり、後者に比較を拒むような特殊性は何もない、という比較の論理が導きだされたのである。東郷は書いている：

「然るに世人或は我邦の朝鮮及台湾に対する関係は、英国の印度に対し、又仏蘭西の印度支那に対するとは其趣を異にし、所謂『同種同文』の国であるから、同化は容易なりと主張するものがないでもないが、斯の如き吾人の断じて信じ能はざる所である。如何ともなれば、同種と称するも、朝鮮及支邦両民族は日本民族と日本民族と其性情を異にし、同文と称するも言語を異にし、思想亦同一ではない。故に同文は単に多少の便利があるという云うこと以外には何等民族上の一致を意味しない」¹⁹⁾。

教育観においても、ルボンは東郷に大きな影響を与えた。集団的な遺伝によって形成される「心的組織」を基本に考えるルボンにとって、人類社会の不平等は自然の摂理であった。高等教育を受けるに値し、かつそれを本当に必要とするのは相応しい「心的組織」をもったごく一部の人々に過ぎない、というのが彼の教育観であった。しかし、「現代民主政治の〔大きな〕万能薬」(ルボン〔東郷訳〕)²⁰⁾としての近代教育が広がったことで、各々の「心的組織」に相応しくない知識や教養を身につけた〈不自然〉なグループが登場するようになった、と彼は警鐘を鳴らしていた。ルボンの社会理論を植民地政策論に応用する東郷にとって、〈イギリス人化されたインド人〉や〈日本人化された台湾人／朝鮮人〉という植民地の現地人がこうした〈不自然〉なグループに他ならなかった。

こうした点を総合すると、東郷版「民族心理学」が次のような比較論理を持っていたことがわかる。すなわち、インドにおいてイギリスが〈イギリス人化したインド人〉の創造によって独立運動を招いた〈失敗〉は、帝国日本の教育政策の今後と無縁ではない、と。実際、『植民政策と民族心理』の結論部分で彼が警告するのが、教育面における植民地政策の失敗によって帝国日本において独立運動が高まりつつある、ということに他ならない。東郷によれば、近年の植民地朝鮮における教育は、「朝鮮人の民族的自覚を促し、人類共通の分化的本能の発展となり、遂に一種の独立運動ともみるべき騒擾を惹起する」に至っていた。また、植民地台湾においても、近年において『『母国延長主義』なるものが高調せられつつあるから、支那民族の性格に関する史的観察に従えば、教育の進歩と共に他日朝鮮に於けると同一の現象見るに至るべきは想像に難くない」と彼は主張したのである²¹⁾。インドの教育政策が比較の対象として見出されたのは、それが反植民地的ナショナリズムを生み出すメカニズムの典型と理解されていたからに他ならなかった。

3. 英領インド教育政策批判とその越境性

3.1 フランスの反同化主義者とイギリス植民地政策

東郷がルボンの民族心理学を採用したのは、植民地政策を論じるための理論的枠組みとしてであった。しかし民族心理学自体がその生成過程から植民地主義と深い関係にあったのである。実は、理論の創始者であるルボン自身がフランスにおいて植民地統治をめぐる論争に深く関わっていた時期があり、また、その後に植民地主義を直接論じること

がなくなっても、ジュール・アルマンらの有力な論者が彼の影響を受けた植民地政策論を展開していくことになる。『植民地政策と民族心理』の参考文献リストを見た限り、東郷はこうしたフランス帝国内での動きを把握していなかった可能性が高い。しかし小熊英二も指摘している通り、東郷をこの系列に位置づけることは十分可能であり²²⁾、また、そうすることは比較の越境的な軌跡を探らんとする本稿の趣旨とも重なる。そこで、以下、ルボンの植民地思想とその伝播を辿ってみよう。

ルボンが最も直接的にフランス植民地政策に関する自論を展開したのは、おそらく1889年にパリで開催された国際植民地会議においてであった²³⁾。フランス帝国の内外から多くの植民地統治関係者が出席したこの会議で注目を集めたのが、ルボンによるフランスの「同化主義」への徹底した批判であった。彼は、同化主義的諸政策が植民地をあたかもフランス本国の一部へと作り変えようとしていると指摘したうえで、あからさまに社会進化論的な言辞をもってそれらを攻撃した。「人間と市民の権利の宣言」に代表されるフランス的価値観を「ネグロ、未開人、アラブ人、黄色人種」に植えつけようとしていることを嘲笑し、また、「脳の発達石器時代の我々の祖先のものときえ適合しない」と見なされる「ネグロ」までもが政治や行政に参加している不毛さを説き、同化主義からの決別を訴えたのである²⁴⁾。

こうしたルボンの「反同化」の論調は決して簡単に受け入れられたわけではない。しかし、10年後に出版されたレオポール・ド＝ソシュールの *Psychologie de la colonisation française* (1899) は、そのタイトル(『フランス植民地化の心理』)からも分かるように「民族心理学」に依拠したまさしくルボン主義的な植民地政策論であった²⁵⁾。この本に特徴的な「反同化」的な見解は、その後一定の支持を獲得していく。ソシュールも参加した1900年の植民地社会学国際会議では、それまでは同化主義者とみなされていた A. ジローを含む参加者が同化主義を非難することで一致した²⁶⁾。また、ジュール・アルマンやジョルジュ・アルディなど、ソシュール以外にもルボンに影響された理論家や植民地行政官が活躍するようになっていく。

こうして伝統的な同化主義政策に対する批判が高まる一方で、多くのフランス人論者がイギリスの植民地主義を模倣すべきモデルと見なして熱い視線を送った。J.B. シーリーの *The Expansion of England* (1883)、序文を寄稿した仏領インドシナの総督 J-L. ド＝ラネサンに「現地人、植民者、母国の利益を最大限にするかたちでいかに植民地が創設され、統治され、豊かにされるかを、フランス人はここで学ぶことができる」書と評されたリチャード・テンブルの *India in 1880* (1880)²⁷⁾、ジョン・ストレイチー

の *India* (1888) といったイギリス人の学者や行政官による権威ある研究が仏訳された。またその一方、19世紀末から20世紀初頭にかけて代表的なフランス帝国主義者であったジョゼフ・シャイエ＝ベール²⁸⁾は、*Colonisation de l'Indo-Chine: L'expérience anglaise* (1892) や *L'Inde britannique: société indigène, politique indigène, les idées directrices* (1910)²⁹⁾ といったイギリス統治に関する本を自らフランス語で著している。(興味深いことにこれらの2冊は英訳されている。) イギリスの植民地政策から積極的に学ぼうとするフランス人帝国主義者を「イギリス愛好者」(Anglomania) と呼ぶレイモンド・ベッツは、「フランス人の間に、フランスとイギリスの政策を比べる傾向があった；そしてフランスはいつもみじめな二着に終わるのであった」と指摘している³⁰⁾。このように、同化主義の対極にあると一般に見なされるイギリス植民地主義に関心が高まっていったことは、従来のフランス同化主義に対する不満の存在を示唆しており、ルボンのような露骨な同化主義批判が少なからず支持されてもおかしくない土壌が既に存在していたと見ることもできるだろう。実際、イギリス型統治の模範化と同化主義に対するルボン主義的な批判の二つの潮流は、例えば、後述するジュール・アルマンの統治論において明確に交差するものであった。平野千果子も指摘しているように、こうした論者のなかでもシャイエ＝ベールとアルマンには、フランスが支配形態を模索していた時期に仏領インドシナ統治に関わっていたという共通の特徴があった。彼らの活躍した時代に同化の理念が無くなったわけではない。しかし帝国領土が急速に拡大されるなか、彼らはインドシナにおける現地人との体験から、同化を厳密に進めることがおよそ非現実的であると悟り、フランス帝国のこれまでの原則にこだわらず、イギリスをはじめとする他国の統治形態を積極的に摂取する比較植民地主義を提唱したのである³¹⁾。

フランスの植民地政策論者が帝国主義競争において長年のライバルであるイギリスからその統治技術を学ぼうとしていたという事実は、比較の歴史的重要性を示すものとして重要である。統治モデルの典型として対比的に論じられることが多いイギリスとフランスのそれぞれの植民地主義ではあるが、〈比較する主体〉として植民地帝国を主題化する視座から捉え直した場合、安易な類型化を現代の研究者に許容するほど両国の関係は単純なものではなかったことが垣間見えるのである。

だが、英領インド教育政策という特定の政策に焦点を合わせた時、両者の関係はこれよりもさらに複雑なものであったことが浮かび上がってくることになる。ベッツの研究を参照しつつルボンと東郷の接点に注意を促す小熊氏の研究は、東郷思想のエッセンスをその「反同化主義」に見いだしている³²⁾。この見方自体は決して誤っていない。ただ

し、「反同化」だけに着目してしまうことによって、東郷がなぜ、特に現地人教育に関する限り、反同化主義の模範とされてもおかしくないはずのイギリス統治を批判したかを見え難くしてしまう可能性も否定できない。そこで本稿は、英領インド教育政策の何が問題化されたのかを検証し、それによってより深く比較の関係性に踏み込んでいきたい。そこで鍵になってくるのが、「マコーレー主義」(Macaulayism)といわれる植民地教育理念の検討である。

3.2 越境する「マコーレー主義」批判

ベネディクト・アンダーソンが「精神的雑婚」(mental miscegenation)と形容する「マコーレー主義」は、教育によって文化的に〈白人化された現地人〉を創出する植民地化の理念を指し³³⁾、提唱者トーマス・マコーレーに由来するものである。インド総督の参事会会員であったマコーレーは有名な「覚書き」(1835年)において、「血と肌の色においてはインド人、しかし、趣味、見解、道徳、そして知性においてはイギリス人であるような階級」を教育を通じて生みだして行政官として登用し、少数のイギリス人統治者と膨大なインド人被支配者のあいだに据えることにより、植民地行政および「文明化の使命」を効率的に行うべきだ、と主張した³⁴⁾。現地人から中間層をつくりだす考えは以前からあったが、問題は彼らを教育するにあたっての教授言語だった。サンスクリット語やペルシア語の使用を主張するオリエンタリスト(Orientalist)と、英語の教授言語化を主張するアングリシスト(Anglicist)のあいだで論争が繰り広げられたが、後者を勝利に導いたのがマコーレーに他ならない³⁵⁾。

いわゆる「マコーレー主義」は総督ウィリアム・ベンティンクによって公の方針とされ、19世紀半ばには英語による高等教育の基盤が英領インドに確立されることになる。現地人官僚を輩出する最高学府としての大学(university)は、1857年にカルカッタ大学、ボンベイ大学、マドラス大学が設立されたのを皮切りに、他にもラホール大学(1869年)、パンジャブ大学(1882年)、アラハバッド大学(1887年)が建てられた。大学に準ずるカレッジ(college)の数は、1902年までには191校(学生数22,909人)に達しているが、そのうち現地語校はたった5校(503人)であり、他ではすべて英語が教授言語とされており、ここにマコーレー的教育の英語中心主義を見てとることができる。また、教育内容をもても、文系教養系のカレッジ(art college)が140に上り、学生数も全体の約74%を占めた。一方、法律系、医学系、工学系、教育系、農業系を含む専門職業系カレッジ(professional college)も存在したものの(それぞれ30, 4, 5,

4, 3校), 官吏養成のための人文教養教育を重視するマコーレー主義においては傍流でしかなかった³⁶⁾。

フランスの「反同化主義者」が批判したのがこうしたマコーレー主義に基づいた英領インド教育政策にはかならない。ただし、「反同化主義者」によって批判されたからとって、マコーレー主義自体が同化主義的な教育理念ではなかったということには注意する必要がある。現地語派のオリエンタリストにしる英語派のアングリシストにしる、インドのイギリス人支配者の多くは、少数のインド人エリートに西洋文明の価値観を伝授し、彼らがそれを「下」に浸透させていくという、いわゆる「濾過理論」(downward filtration theory) の実践方法を模索していたのであり、インド人全般を直接的に〈イギリス人化〉することにはそもそも関心がなかったとってよい³⁷⁾。論争にアングリシストが勝利し、英語による教育が導入されたからとって、いわゆる「同化政策」がとられたわけでは全くなかったのである。この教育の直接の対象はごく少数のエリート層に限られており、しかも彼らのほとんどが都市部(特にカルカッタが重要)の男性ヒンズー教徒であり、女性や低カーストの人々、またイスラム教徒もほとんど含まれていなかった³⁸⁾。また、英語による教育といっても、それを通じて英語が広く浸透したわけではなく、例えば1901年の国勢調査によれば、英語を話す現地人は男性と女性でそれぞれ全人口の0.0056%と0.0001%に過ぎなかった³⁹⁾。このように圧倒的多数のインド人が排除されていたことを考えると、決して同化主義的とはいえないマコーレー主義政策であったが、にも拘わらず、それはフランスの「反同化主義者」に支配に対する最も深刻な不安定要因として見出されていくことになった。以下、その批判言説を検討していく。

まず第一に、その「民族心理学」が東郷實に直接的影響を与えたルボン自身が、マコーレー主義的な植民地教育政策の手厳しい批判者であった。保守主義者であるルボンの教育観は、その反同性主義によって特徴づけられる。近代的高等教養教育を通じて「大衆」の精神にポスト啓蒙主義的な価値観(「平等」や「権利」)を注入ことは単に不毛であるだけでなく、政治的に危険であると彼は考えていた。パリでは、例えば失業した教師たちにこうした反体制的傾向が見られると指摘し、「活かす機会がないような知識の獲得は、人を反乱へと駆り立てる一つの確かなやり方である」と警告している⁴⁰⁾。しかしルボンの「大衆」への眼差しは単に階級主義的なものではなく、同時に人種主義的なものであったことを見落とすべきではない。ルボンがパリの失業教師と並列して挙げた反体制分子のもう一つの例が英領カルカッタの「教育を受けた人々の特別な階級、すなわ

ちバブ [Baboos]⁴¹⁾であったのであり、彼の教育論を植民地的状況に応用した東郷實も実際この見解をぬかりなく引用しているのである⁴²⁾。

東郷が参照する1890年代半ば以降のよく知られたルボンの主要著作 — *Psychologie des foules* (1895) や *Psychologie des temps nouveaux* (1920) など — に植民地主義を直接主題化したものはない。しかし上述したように、既にルボンは反同化主義的な立場から植民地政策を論じていたのであり、また、ちょうどこの頃に西洋式教育を受けたインド人エリートから独立への要求が萌芽しつつあったことを考えると、彼の教育論においてマコーレー主義への批判が人種と階級が交錯するかたちで論じられても不思議はなかった。実際、1889年の植民地会議の場でも、被支配者による抵抗運動と教育の関係について説明する際にルボンが挙げたのが、マコーレー式教育を受けた英領インドのヒンズー教徒の例に他ならなかった。例えば仏領アルジェリアにおいて、フランスが被支配者に本国式教育を施せばどうなるかについて、ルボンは以下のように宣言している。「ちょうど、ヒンズー教徒のためのインドを、というのがイギリス式教育を受けたすべてのインドの現地人の合言葉であるように、現地人の全員一致したスローガンは、アラブ人のためにアルジェリアを、となるであろう」。たとえ現段階で数的には微々たるものであっても、反英的な現地人エリートの存在は「インドにおけるイギリス権力の将来にたいする最も深刻な危険」⁴³⁾になると警告し、本国式教育をフランスが植民地に導入することの弊害をイギリスの例を引き合いに出しながら説いたのである。

反植民地主義ナショナリズムの発生要因をマコーレー主義的教育モデルに見いだすこうしたルボンの言説は、そのままフランスの反同化主義者に受け継がれることになった。例えばソシュールもルボンと同じように英領インド教育政策に触れているし⁴⁴⁾、ルボン主義者であると同時に「イギリス愛好者」としても知られたジュール・アルマンにも同じことがいえた。アルマンは主著 *Domination et Colonisation* (1910)⁴⁵⁾ においてベトナム人にフランス式高等教育を与えることの危険性を強調したが、その際、彼が読者に喚起したのも英領インドの事例であった。彼は、マコーレー主義がヒンズー教徒のエリート層から先祖伝来の高潔な文化遺産を奪い、かわりに西洋近代の悪徳を植えた、という英領インドを引き合いにだす比較の語りをもって、仏領インドシナへの本国式教育導入の危険性を主張したのである。(またその際、ルボンだけでなく、カーゾン総督やジョン・ストレイチー卿などによるイギリス帝国内部からの批判を援用していた。)⁴⁶⁾

「イギリス愛好者」さえもがことマコーレー主義的教育政策に関してはイギリスのインド統治に極めて否定的であったことを裏づけるもう一つの例としては、ジョゼフ・シャ

イエ＝ベールによる比較植民地研究が挙げられる。*La Colonisation de l'Indo-Chine* (1892) においては、英領インド政策に関して、「エリートに高度な学問分野を教育すべく大金をつぎ込み、長いあいだ初等教育を無視」するという「失敗」を犯したと指摘はするものの、同時に、それを反省して「いたるところで初等教育を導入し始めている」として近年の動きを評価していた⁴⁷⁾。しかし18年後の *L'Inde britannique* (1910) では、評価を厳しくする。官吏養成のために必要なこととはいえ、西洋人化された現地人を生産しつづけたことにより、インドの習慣と伝統を体現せず、「限られた、理論的な性質」の知性しか有しない者が権力を握りつつあるとシャイエ＝ベールは指摘する。そもそも、「遺伝的ないし獲得的経験」が欠如した者が現地人を代表しつつあることは、「かくも長きにわたって純粋に貴族政治の国の国民であった人々には全くもって正統と認められない」ことであり、イギリスの教育政策が招いた「最悪の種類の政治的失態」である、と彼は批判するのである⁴⁸⁾。また、インドの伝統的社会秩序を乱したことに加え、植民地支配に反抗的な勢力を生みだしたことも彼には問題と映った。彼は、植民地政府の取り組みは、「中途半端に教育された者たちから成る、気短で危険な人種」を生みだしてしまっていると、ルボンを彷彿とさせる論調で述べる。さらに、行政職のポスト不足からくる就職難によって、卒業生が「自らの階級の権利と自分で呼んではいるものの、本当は見栄に過ぎないものを維持するために政治へと身を投じていく」とし、彼らが反体制化していく強い傾向を指摘するのである⁴⁹⁾。

これらのマコーレー主義的教育に対する批判は、フランスという他の帝国国家の論者たちによって展開された、いわば比較植民地政策論の産物であった。比較を行った側のフランスの帝国主義者たちは、自国の植民地政策を改革するという動機のもとに他国の植民地政策を主題化したのであった。ところで、この言説にたいし、比較対象にされた側のイギリス帝国の論者が単に受け身的だったかということ、必ずしもそうではなかった。それを示すものとして、ジョン・ストレイチャー卿と彼の統治論の仏訳の事例が挙げられる。英領インドで最も影響力のあった植民地官僚の一人であり、また教育政策にも深く関わったストレイチャーは、マコーレー主義に関するフランス人論者の批判的分析の存在を認識してただけでなく、それにたいして応答をした点で注目される。ストレイチャーの事例は、フランス人によるイギリス植民地政策の研究が比較対象のイギリスの論者に影響を及ぼすという、いわば比較の逆流現象ともいえる現象を示してる点で興味深く、以下、簡単に触れておきたい。

ストレイチャーは、1888年に *India* の初版を出版しているが⁵⁰⁾、それは1892年に上で論

じたジュール・アルマンによって「前書き」つきで仏訳され、*L'Inde*として出版された⁵¹⁾。その後ストレイチーは *India* の第2版を出版するが、そのなかで、「我々のインド帝国についての、非常に有能で知的な外国人の観察者による見解」を含むものとして、フランス語版に寄せられた訳者アルマンによる前書きに言及する。まず序文において、ストレイチーは、シャイエ＝ベールともにアルマンを英領と仏領の両方の事情に通じた植民地政策のエキスパートとして称賛する。そして、イギリス人が彼らの「落ち着いた、偏りのない証言」から自分たち自身の植民地政策を見つめ直すことができると述べ、他国による自国の統治への比較評価を積極的に活かすことの可能性を示唆する⁵²⁾。さらに本文においては、マコーレー主義のもとでの英文学を用いた教養教育⁵³⁾が学生たちを政治に覚醒させていることを指摘する文脈で、アルマンの「前書き」に言及してこう述べる。

「アルマン氏が述べているとおり、おしなべてこの種の教育は『アジア的な脳にたいして危険な食物である。それは彼らが知っていること、感じることの基礎のすべてを混乱させ、彼らから道徳的安定性を奪い、精神を最深部まで掻き乱すように思われる』のである」⁵⁴⁾。

フランス人による英領インド教育政策批判が、インド支配の中枢に永らく在ったイギリス人による著作に援用されたという事実は、植民地政策論の展開が、間帝國的でありえただけでなく、複雑な相互作用の場を形成していた可能性を提示しており、〈比較の内在批判〉にとって示唆的である。

一部の現地人エリートにたいして高等教育レベルの人文教養教育を本国言語によって行うのがマコーレー主義的教育だとすれば、それへのアンチテーゼは、できるだけ多くの現地人に職業実践的な教育を、初等教育レベルで、しかも現地語によって行うことであつた。上にみたマコーレー主義への批判的言及は、実際どの程度、フランスの植民地教育政策の策定に影響を与えたのだろうか？ まずいえることは、仏領インドシナに関する限り、ソシュール、シャイエ＝ベール、アルマンらの反対にも拘わらず、安南人エリートがフランス語による高等教育を受ける流れを変えるまでには至らなかった、ということである。スコット・マコンネルによる研究が示しているように、例えばアルマンの *Domination et Colonisation* は確かによく読まれたものの、帝都パリに留学経験の

ある現地人の学生を中心とした独立抗争の組織化に歯止めがかかることはなかった⁵⁵⁾。

しかし、インドシナの外ではどうだろうか。マイケル・アダスは、意識的に反マコーレー的な教育政策がとられたのはアフリカの新領土においてであったと論じ、その例としてジョルジュ・アルディの教育政策を挙げている。ソシュールやアルマンらのルボン主義者の系譜に属し、1914年に仏領西アフリカ教育査察官に任命されたアルディは、アフリカ人を本国フランスの価値観や制度に同化することの不可能性を説き、技術者、大工、鍛冶屋などの労働者を生み出す実践的な職業教育を重視する政策を行った⁵⁶⁾。

こうしたフランス帝国内での動きが、ある植民地での教訓を別の植民地での統治政策に活かそうという比較的発想の結果であったとすれば、それは比較が間帝國的なものであっただけでなく、間植民地的なものでもあったことを示唆している。ただし、フランス植民地主義は筆者の専門外であり、反マコーレー主義言説のフランス帝国内の還流や歴史影響についてはこれ以上立ち入ることを避け、今度はイギリス帝国内の同じような間植民地的な比較の動態に目を移してみたい。

上述したストレイチーの見解に見られるような、〈イギリス人化されたインド人〉としての「バブ」の存在を危険視する言説⁵⁷⁾は、19世紀末までには英領インドの支配層の中にも広がっていた⁵⁸⁾。政策的にも、英語によるエリート教育を〈失政〉と見なした上で、「マコーレーの子供たち」(Macaulay's children)の勢力を弱体化する試みがなされるが、その最たるものがベンガルの「バブ」を偏執的なまでに警戒したカーゾン総督(在任1899年-1905年)による現地語を重視する教育改革であった⁵⁹⁾。しかし、こうしたインドでの展開を踏まえ、本稿が特に注目するのは、むしろインドの外で、反マコーレー主義を打ち出したイギリス植民地主義のあり方である。そこで参考になるのが、東郷實も参照することになる総領事クローマー卿によるエジプト保護領統治の例である。クローマーがエジプトに赴任するのは1879年のことであるが、重要なことは彼がその直前までインドに滞在しており、その後もイギリスのインド統治を比較参照の対象としていたということである。彼はインド時代からマコーレー主義に違和感を感じていたようであるが、彼がエジプトへと離れたあと、インドでは1885年の国民会議派の結成をへて、「マコーレーの子供たち」による反植民地主義的な動きがいよいよ顕在化するようになる。

クローマーはインドでのこうした動きに関心を払いながら、自らのエジプト支配においてはマコーレー主義とは異なる現地人教育政策をとることにより、「多弁で、中途半

端に教育された現地人」が「扇動者」⁶⁰⁾となってナショナリズムを牽引する可能性の芽をあらかじめ摘むことを試みたのである。もっとも、政治的には自由党に近い彼がリベラルなマコーレー主義への批判を公にすることはなかったが⁶¹⁾、例えば1906年にストレイチャーに宛てた以下の書簡には彼の本心がはっきり刻印されている。

「東洋に住めば住むほど、私はますます、多くの側面、特に研究に関する事柄において、インドは何を避けるべきかについての教訓を提供しているのだということを確信してきました。教育に関していうならば、我々は皮相的に教育された上流階級を生みだしてきました [...] そして、我々は、扇動者の影響力をいくらか相殺すべく、全国的に教育の一般的水準を上げる方法をもって解毒剤を提供するということに向けて、全くもって何もやってこなかったのです」⁶²⁾。

インドの「教訓」から学ぶというクローマーの明確な比較意識は、実際の教育政策に反映されていた。教育省の公共事業省内の一部局への格下げ（1883年）⁶³⁾や授業料自己負担の方針⁶⁴⁾などにも表れていたように、教育政策全般に関してほとんど怠慢ともいえるほどに消極的であったことが指摘されているが⁶⁵⁾、ここで特に注目されるのは、高等教育において反マコーレー主義的な傾向がはっきり認められることである。クローマーは大学教育の政府による提供はそれがナショナリズムにつながることを懸念して拒否した⁶⁶⁾。また、彼の時代、英語による高等教育は、法律、医学、工学、農学、薬学などの専門教育機関で行われたが、そこでの重点は専門的、実用的な学問であり、インドで行われたようなエリート官吏養成のための教養教育は排除されていた。

3.3 『植民政策と民族心理』における比較の反復／交錯

ここまで英領インド教育政策をめぐる言説の越境的軌跡を追跡してきたが、最後に日本の東郷實をそこに位置づけてみよう。既に見たように、東郷がインドの事例を引き合いに出すのは、帝国日本の植民地における教育と反植民主義ナショナリズムをめぐる問題を映し出す鏡としてであった。一方、これも上で明らかにした通り、フランスのルボン主義的植民地政策論者やクローマー卿をはじめとするイギリス国内の反マコーレー主義者もそれぞれの理由から同じインドを比較の対象としていた。『植民政策と民族心理』においては、こうした複数の間帝國的ないしは間植地的な比較言説が、そのまま東郷自身の比較言説の基盤を形成していく。

例えば、教育政策が現地人の統治にとっていかに普遍的課題であるかを説く文脈で、東郷はシャイエ＝ベールのインドへの言及を引用しながらこう述べる。

「即ち植民地の教育問題は、シャイエ（Joseph Chailley）が印度の教育問題を論ずるに際して云える如くに『植民地政策中最も重大にして、且つ困難なるもの』の一つで、世界は多く失敗の歴史を物語っている」⁶⁷⁾。

権威として引用されるシャイエ＝ベールの英領インド教育論自体が母国フランスの植民地統治策に資するという明確な比較への意思のもとに展開されていたことを考えると、東郷のここでのインドへの言及は、単なる比較というよりは正確には比較の反復であった。

また東郷は、シャイエ＝ベールのいう「印度の教育問題」の根本原因が「マコーレー主義」にあることを指摘し、その欠陥を示すために、プレジデンシー・カレッジ（カルカッタ）の校長をつとめたイギリス人、H.R. ジェームズを参照し、こう述べる。

「然しマコーレー卿の案出した教育制度には、ジェームス（H.R. James）も云へる如くに、一、印度固有の教育を全然無視した訳ではないが、尚ほ之に対し注意の不十分であったこと、二、「アラビック」及「サンスクリット」は直接の功利以外に、伝説的 necessary のために之が研究の理由あることをを忘れたこと、三、教育の智的方面以外に、尚ほ大に準備をなすの必要あるを無視したこと、等、その他多くの欠点を有したことは争ふべからず事実である」⁶⁸⁾。

そして、本国式教育を受けた現地人エリートが、その高い職業的希望を満たせないことによって鬱積した不満を帝国支配者に向ける危険性を説く中で、東郷はイギリスの高名なジャーナリストであったヴァレンティン・チロルの以下の文章を引用する。

「その制度幾多の欠陥を有し、為に過度に教育ある階級を生じ、彼等は徒らに志望大にして職業に就くを欲せず、その高等教育を受けた者は、西欧文化の皮相を窺い得たるに止まり、而も空理空論を事として、危険なる攪乱の種子を散布しつつあり、印度の不安は畢竟するに、此教育制度の生んだ悪結果に外ならない」⁶⁹⁾。

ここではマコーレー主義に批判的なイギリス人論者の言葉を借りながら東郷の英領インド教育政策批判は展開されている。ところでイギリス人論者からの引用という面で特に注目されるのが、クローマーの植民地統治論の援用である⁷⁰⁾。チロルやジェームズのものとは比べて、クローマーの議論はそれ自体が比較の性質を帯びていた点で本稿の議論にとっては特に重要なのである。例えば東郷は、クローマーの *Ancient and Modern Imperialism* (1910) の一節を示しながら、本国言語による現地人教育が独立運動につながりないかねないことを、インドを例にとって主張する。

「更にクローマー卿 (Cromer) が『征服者は被征服地の土人を同化せんが為めに、国語の普及に努力して居るけれども、吾人の経験に依れば、国語の普及は同化の目的を達し得ないばかりでなく、却って土人は教育の結果、その智識を高め、従ってその民族の独立自治を自覚し、征服者に対し反抗的運動を開始するものであることは、インドの実例に依って明らかである』と称したのは植民地に於ける国語普及の奈邊に帰着するかを説明せるものであって、植民地統治に多大の経験を有する卿の偽りなき告白と称すべきである⁷¹⁾。

上に見たように、クローマーはインドとエジプトという同じイギリス帝国内の二つの異なる支配地を比較し、後者において意識的に前者と異なる教育政策を行っていた。東郷はこうした間植地的な比較への意思をクローマーに読み取っていたのである。彼は『植民政策と民族政策』よりも前に執筆された『台湾農業殖民論』(1914年)の中で、「賢明なるクローマー卿」は「印度に於ける教育制度の弊害」を考慮しつつエジプト統治を行っており、「埃及に於ける教育の未だ印度に於けるが如き多大の弊害を見るに至らざるは埃及統治の一大成効なりと称すべき⁷²⁾」と論じているが、これは彼がクローマーの比較意識を理解していたことの証左と見ることができる。シャイエ=ベールを引用したことと並んで、東郷によるクローマーの引用もまた比較言説の反復を明るみに出すものとして注目される。さらに、フランス人のシャイエ=ベールとイギリス人のクローマーの両方の英領インド教育政策批判が同じテキスト上に現れるという意味では、もともと間帝国／間植地的性質をもった複数の統治論が交わる比較の交錯点として『植民政策と民族心理』を読むこともできるであろう。

比較の交錯という意味では、理論家であるルボンと統治者であるクローマーの関係が興味深い。東郷という帝国日本のルボン主義者によって引用されることで、クローマー

の植民地統治論は、間接的にはあるが、「民族心理学」と接点を持つことになったのである。越境していく植民地言説で不意につながったイギリスのクローマーとフランスのルボン—この二人はその思想においてどの程度共通しているのだろうか。東郷によって引用はされていないが、クローマーの論文 ‘The Government of Subject Races’ (1913) にはこの問いに対して示唆的と思われる以下のような一節がある。

「自由制度というものは、この語のすべての意味において、来る何世代にもわたって、インドやエジプトのような国々には不向きなのである。もし隠喩、— しかもあまり洗練された類のもの —、の使用が許されるとすれば、東洋の豚の耳から西洋の絹の財布はできない、と云うこともできるであろう。いずれにせよ、もしこの作業の不可能さを問題にするなら、その製造過程は非常に長く退屈なものである、ということが認識されるべきである」⁷³⁾。

「粗悪な材料から良質のものを作ることはできない」を意味することわざ「豚の耳から絹の財布はできない」(You can't make a silk purse out of a sow's ear.) をもじってつくった文を含むこの文章は、ルボンのようにあからさまな表現は使われていないものの、クローマーの社会進化論的な認識を示している。彼は、被植民者が本国の政治制度(議会制民主主義、等)を自分のものにするには数世紀が必要で、事実上不可能であると云っているのであり、それはルボンの見解とほぼ同じである。被支配者は「粗悪な素材」でしかなく、ルボン風にいえば、その「心的構造」においてまったく劣等なもの、ということになるであろう。

こうした根本的な類似性を考えれば、ルボンとクローマーが東郷のテキストのなかで整合的に共存できることが理解できる。言語や制度をめぐる上記のクローマーの考えは、東郷が引用するルボンの次のような見解、すなわち、「或民族が勝手にその制度を選定し得ないのは、恰もその毛髪及眼睛の色彩を勝手に選定することのできないのと同じである」や「或民族が [...] 国語と異った言語を採用することがあっても、相異なった」民族は永く同一の言語を話すことが出来ずして、数代の後には其の採用した言語は全然変化してしまう」(ルボン：東郷訳)⁷⁴⁾、に驚くほど似通っているのである。

4. 結 語

ある帝国国家が別の帝国国家の特定の植民地政策に着目し、それを自己の問題を写し出す鏡として前景化して論じる——こういった場合には、植民地政策論は個別の帝国国家の枠を超えて論じられる、間帝國的な性質を帯びたものであった。本稿は、英領インドの事例を批判的に主題化することによって帝国日本の植民地教育政策を方向付けようとした東郷實の言説に、〈比較する主体〉としてのこうした帝国のあり方を照らし出した。さらに、東郷が『植民地政策と民族心理』において参照したイギリスやフランスの植民地統治論の系譜を詳しく辿っていくことによって、比較言説の越境性だけでなくその重層性を明らかにした。東郷が依拠した植民政策論者たちも、他者を鏡とし自らを修正し補強しようという比較への意思にすでに貫かれており、彼ら自身が〈比較する主体〉であったのである。つまり、〈比較する主体〉は、単に複数存在していただけでなく、間帝國的な言説空間にあって相互に影響を及ぼしながら、特定の見解を形成したり強化していたのであり、東郷は『植民地政策と民族心理』の執筆を通じてこのプロセスに自らを投じていくことになった。さらに、エジプトに支配者として君臨したクローマーによるインドのマコーレー主義批判を論じることにより、同一の帝国国家の内部でも比較の力学がはたらくことがあったことを本稿は示した。クローマーのエジプトでの教育政策は、同じイギリス帝国のインドの教育政策との明確な比較意識のもとに策定されていたのであり、ある植民地が他の植民地との比較によって統治政策を策定／実践しようと試みていた事実は、比較が間帝國的なものであるだけでなく、同一帝国内において間植民地的でもありえたことを物語っている。こうした少なくとも二種類の比較言説を同時に取り込む東郷の英領インド教育政策批判は、比較の視座に貫かれた植民地政策論が「帝国のはざま」にあってさらに反復され、交錯していく軌跡を残すものとして見ることができるのである。植民地統治をめぐる議論のこのような重層的な越境性は、「同化主義的なフランス帝国／帝国日本」、「多文化主義的なイギリス帝国」といったような大ざっぱな類型化では見えてこない支配の論理と実践の存在を示している。このことは、単純な比較が多く的事象を覆い隠してしまう危険性を現代の植民地主義研究者に警告しているのではないだろうか。

このように比較は危険を孕むものであるが、その一方で、それを避けて通れば〈安全〉であるという簡単な話でもないことにも注意する必要があるだろう。比較を迂回し個別研究を徹底させるだけでは、植民地政策論の越境的な性質を見落としてしまうだけ

でなく、特定の支配経験を過度に一般化することにもつながりかねない。英語圏を中心に展開する近年のポスト・コロニアリズムにおいては、ヴィクトリア朝時代のイギリス植民地主義（とりわけインド支配）が普遍モデルとして扱われ、そこから導きだされる批判諸概念を他の支配の文脈に〈応用〉することが慣用的になっている。例えば、朝鮮研究では「サバルタン性」(subalternity)や「雑種性」(hybridity)といったインドの植民地経験から抽出されたポストモダンの批判概念を一部応用し、日本支配下の植民地経験を論じる、いわゆる「植民地近代論」が近年盛り上がりを見せている⁷⁵⁾。こうした応用は時として非常に有効でありうる一方、問題もないわけではない⁷⁶⁾。タニ・バーロウも指摘している通り、英領インド支配を植民地主義の普遍モデルと定義してしまうと、他の植民地主義がその単なる派生形として理解され、それによって多くの課題が不問に付されることにつながりかねない⁷⁷⁾。また、レオ・チンが主張しているように、〈西洋中心主義批判〉や〈近代の超克〉といったポスト・コロニアリズムの価値観は、帝国日本が統べる東アジアの文脈においては被支配者だけでなく支配者の論理でもあったのであり、そうした歴史的転倒を看過して聖典化された理論を無批判に応用することは、それ自体が皮肉にも西洋中心的になってしまうという〈比較の罟〉に陥る危険性がある⁷⁸⁾。そして最後に、イギリスのインド支配を研究対象として見出すことが、フランスや日本といった〈比較する主体〉としての植民地帝国の論者によってすでに実践されていたことは本稿が示した通りである。ある意味、「国際化」を目指す現代の植民地主義研究者は過去の帝国主義者に先を越されていたのであって、このことは、比較が、聖典化された概念の応用をめぐる共時的な問題にとどまるものではなく、通時的な問題でもあり、歴史的遡行を通じた内在的批判を通して再検討されるべきものであるということを示唆している。

比較は一方では多くの危険をはらんでいるが、それは避けることもできないというのが、次第にグローバル化する植民地研究のこれからの課題である。ポスト・コロニアル研究が誕生して四半世紀近くが経過した現在、植民地主義の共同研究に求められていることの一つは、比較を常に問題化することを通じて乗り越える、ポスト・コンパラティブな視座の追求ではないだろうか。

注

- 1) この共同研究は同志社大学を中心とした研究グループ DOSC (Doshisha Studies in Colonialism [同志社植民地主義研究会]) によって行われている。2007年4月からの3年間は、「ヨーロッパと日本における植民地主義と近代性」をテーマに、同志社大学人文科学研究所・第16期研究会の第9研究班として活動し、現在に至る。尚、この共同研究は日本学術振興会から研究助成 [科学研究費・基盤研究(C)・研究課題番号: 19520548] を受けている。
- 2) 本稿は、同志社大学人文科学研究所専従研究員・研究助成(2008年度)および村田学術振興財団研究助成(2009年度) [採択 No: A91209] の成果である。本稿は上述の共同研究に刺激を受けて執筆されたものであり、また、メンバーである岡本真希子氏および平野千果子氏にはそれぞれ日本帝国史、フランス帝国史の立場から貴重な助言をいただいた。深く感謝申し上げる。ただしここで示される見解は筆者個人のものであり、不備や誤りの責任もすべて筆者に属する。
- 3) 東郷實『植民政策と民族心理』(岩波書店, 1925年)
- 4) 東郷實の経歴および出版歴には、金子文夫「東郷実の年譜と著作」『台湾現代史研究』創刊号(1978年), pp. 127-136を参照。また、『植民政策と民族心理』と『日本植民論』(文武堂, 1906年)の二冊の東郷の著作の要約が、「付録 文献解題名」酒井哲哉編『「帝国」日本の学知 第一巻「帝国」編成の系譜』(岩波書店, 2006年), p. 35にある。東郷の植民地政策論を扱った論考は多くないが、例えば以下のものがやや詳しく論じている: 小熊英二『〈日本人〉の境界』(新曜社, 1998年), pp. 168-194; Michael A. Schneider, 'Colonial Policy Studies in a Period of Transition: Nitobe Inazo, Okawa Shumei, and Togo Minoru at Takushoku University', 『拓殖大学百年史研究』, 第3巻(1999年), pp. 1-28.
- 5) イギリスだけが『植民政策と民族心理』において比較の対象として論じられたわけではない。フランスはもちろんのこと、オランダやアメリカ合衆国の植民地統治にも多くのページが割かれている(合衆国の場合はそのフィリピン支配)。現地人社会の習慣・伝統を利用した統治を唱える立場から蘭領東インドの植民地経営を高く評価するなど興味深い点が多いが、本稿は、筆者の専門領域であるイギリス植民地主義に対する東郷の見方に分析の対象を限定する。
- 6) 本稿は欧米の社会理論や植民地政策論を参照しながら論じた代表的な植民地主義論者として東郷實をとりあげたわけであるが、帝国日本の他の論者(例えば後藤新平や竹越与三郎など)との比較が今後の課題として残されている。
- 7) イギリス帝国史研究者が日英比較の視点から帝国主義を分析したものとして、木畑洋一『イギリス帝国と帝国主義 — 比較と関係の視座 —』(有志舎, 2008年)がある。〈比較〉に関して示唆的な議論を多く含んだものとなっている。梶井佳広『「植民地」支配の史的研究 — 戦間期日本に関する英国外交報告からの検証 —』(法律文化社, 2006年)も同様に比較の視点から植民地支配にアプローチしているが、こちらの研究の焦点は日本

の帝国支配（より具体的には日本の朝鮮統治）がイギリスにどう観察されていたかに合わされている。

- 8) 本稿の議論にはフランス人の植民地政策論が不可避的に関係してくるが、筆者には原語よって直接それを検証する能力がないため、英語訳のある一次資料および英語圏の研究者によるフランス帝国史研究の成果に依拠せざるを得なかった。これが理想とは程遠い状態であることは筆者も自覚しており、こうした欠陥を補うべく、今後はフランス帝国史の専門家との対話が必要だと考えている。しかしその一方で、フランス人論者の植民地政策論が英訳されたり、逆にイギリス人論者のものが仏訳されていたという事実そのものは、比較が植民地思想の生成の一部を構成していた可能性を示唆している。〈比較する主体〉としての帝国国家が言語の壁を越えて統治について考えていた限りにおいて、翻訳を単なる原版のコピーと見なすのではなく、背後にある比較のポリティクスに着目するのも重要である。特に日本の場合、植民地政府の主導で外国の植民地主義に関する文献の翻訳が行われており（例えば台湾の旧慣調査会によるもの）、植民地政策論に比較の占める役割は決して小さくなかったと考えられる。尚、欧米の植民地主義がいかに帝国日本で研究されていたかについては、例えば以下の研究を参照：松田吉郎「台湾協会による世界植民地研究」『兵庫教育大学研究紀要』第23巻（2003年）、pp. 33-37；柳瀬善治「明治大正期の植民地思想形成への一試論：ポール・ルロア＝ポーリュウ受容の諸相」『三重大学日本語文学』第13巻（2002年）、pp. 67-93。（本稿で論じるスペースはないが、東郷もルロア＝ポーリュウを好意的に参照していた。）
- 9) 例えば、共同研究会のメンバーでもあるフランス植民地主義研究者の平野千果子は、「日本の支配が最も過酷だった」という、欧米の植民地に対して日本植民地主義の「特殊性」を強調する比較の視点が存在することを指摘し、その問題点を論じている。平野の考えでは、そういった視点が日本支配の残虐性を明らかにしていくという良心に基づいていることに疑いはないものの、安易な比較は「フランスに植民地化された人たちは日本の支配を受けるよりはましだった、という別の無意味な前提につながっていく」のであり、「それはフランスの支配を受けた人々の苦しみを軽んじることでもある」のである。平野千果子「フランスの事例にみる「植民地忘却」を考える——『〈新〉植民地主義論』を手がかりに——」西川長夫、高橋秀寿（編）『グローバリゼーションと植民地主義』（人文書院、2009年）、pp. 63-78, pp. 71-74.
- 10) この表現は共同研究のメンバーである板垣竜太氏から拝借した。
- 11) Ann Laura Stoler and Carole McGranahan, 'Introduction: Refiguring Imperial Terrains', in (eds.) A. Stoler, C. McGranahan, P. Perdue, *Imperial Formations* (Santa Fe: School for Advanced Research Press, 2007), pp. 3-42.
- 12) 駒込武「『帝国のはざま』から考える」『年報・日本現代史』第10号（2005年）、pp. 1-21. 台湾においてイギリスと日本の帝国主義が折り重なる状況を論じた駒込による以下の二つの論考は〈比較の内在批判〉を考える上でも非常に示唆的なものである：駒込武「日本の植民地支配と近代：折り重なる暴力」『トレイシーズ』第2巻（2001年）、pp. 159-197；

駒込武「在台軍部と「反英運動」——ジュノー号事件を中心に」松浦正孝（編）『昭和・アジア主義の実像』（ミネルヴァ書房，2007年），pp. 259-285.

- 13) 東郷（1925年）の「凡例」の p. 1.
- 14) Gustave Le Bon, *The Psychology of Peoples* (New York: G.E. Stehert & Co., 1912), pp. 81-82, 東郷（1925年），p. 105, 199に引用
- 15) 筆者のルボン理解はルボンによる以下の著作の英語訳の分析に依っている。Gustave Le Bon, *The Crowd: A Study of the Popular Mind* (New York: Macmillan, 1896) [Gustave Le Bon, *Psychologie des foules* (Paris: Felix Alcan, 1895) の英訳] ; Gustave Le Bon, *The Psychology of Peoples* (New York: G.E. Stehert & Co., 1912) [Gustave Le Bon, *Les Lois psychologiques de l'évolution des peuples* (Paris: Alcan, 1894) の英訳] ; Gustave Le Bon, *The World in Revolt: A Study of the Popular Mind* (New York: Macmillan, 1921) [Gustave Le Bon, *Psychologie des temps nouveaux* (Paris: Ernest Flammarion, 1920) の英訳] ; 尚, ルボンの思想の概要には, Jaap van Ginnen, *Crowds, Psychology, & Politics, 1871-1899* (Cambridge: Cambridge University Press, 1992); Josep R. Llobera, *The Making of Totalitarian Thought* (Oxford: Berg, 2003), を参照。
- 16) 東郷は, 処女作『日本植民論』(1906年) のなかで, 白人のみが支配する適性を備えていると見なす点で欧米の植民政策論が一致していると不満をもらし, 「黄禍論」を批判しつつ日本人の支配者性に訴えていた [東郷 (1906年), pp. 359-360, 362]。また, 『台湾農業殖民論』(富山房, 1914年) においても, 日本が台湾において植民地経営に「成功」していることを見れば, 西ヨーロッパの白人だけが支配者として適しているという暗黙の了解がいかに誤っているかが分かる, と主張していた [東郷 (1914年), p. 9]。
- 17) 東郷 (1925年), pp. 343.
- 18) *ibid.*, pp. 343-344 ; イギリスのアイルランド支配だけでなく, 同じような理由でドイツとロシアによるポーランド支配にも東郷は言及している。札幌農学校を卒業し, ドイツ留学中にはマックス・ゼーリングに学んで『独逸内国植民論』(拓務局, 1911年) を著した東郷にとって, いわゆる「内国植民地主義」は重要なテーマであり続けた。
- 19) 東郷 (1925年), p. 115.
- 20) Le Bon (1912), p. xv., 東郷 (1925年), p. 201に引用。
- 21) 東郷 (1925年), p. 342.
- 22) 小熊 (1998年), pp. 174-182. 山本有造も, 一部小熊の議論にも依拠しながらフランス人による同化主義批判を日本の論者に関連付けて論じている。山本有造「植民地統治における「同化主義」の構造——山中モデルの批判的検討——」, 『人文学報』第83号 (2000年), pp. 57-73, 特に pp. 59-61.
- 23) ストラーとクーパーが指摘しているように, こうした国際会議の場で植民地政策が議論されたこと自体が, 比較の歴史的な重みを示している。Ann Laura Stoler and Frederick Cooper, 'Between Metropole and Colony: Rethinking a Research Agenda', in (eds.)

- A. Stoler and F. Cooper, *Tensions of Empire* (Berkeley: University of California Press, 1997), pp. 1-56, p. 13.
- 24) *Compte-rendu de Congrès Colonial International de Paris, 1889* (Paris: A. Challamel, 1889) [以下 *CCCI*], pp. 59-60 [Martin Deming Lewis, 'One Hundred Million Frenchmen: The "Assimilation" Theory in French Colonial Policy' in *Comparative Studies in Society and History*, vol. 4 (1962), pp. 129-153, p. 138に引用]. この植民地会議については Raymond F. Betts, *Assimilation and Association in French Colonial Theory, 1890-1914* (Lincoln: University of Nebraska Press, 2005) [1st edition, 1961], p. 68も参照。
- 25) L. de Saussure, *Psychologie de la colonisation française* (Paris: Félix Alcan, 1899). ルボンのソシュールへの影響については John E. Joseph, 'Language and 'psychological race': Léopold de Saussure on French in Indochina', in *Language & Communication*, vol. 20 (2000), pp. 29-35を参照。他にソシュールの思想を論じたものとして Robert J.C. Young, 'Race and Language in the Two Saussures', in (eds.) P. Osborne and S. Stanford, *Philosophies of Race and Ethnicity* (London: Continuum, 2002), pp. 63-78も参照。
- 26) Hamid Irbough, *Art in the Service of Colonialism* (London: Tauris Academic Studies, 2005), p. 73; Betts (2005 [1961]), pp. 69-76; Patricia M.E. Lorcin, *Imperial Identities* (London: I.B. Tauris Publishers, 1995), p. 194.
- 27) Betts (2005 [1961]), p. 46に引用。
- 28) フランス帝国主義におけるシャイエ＝ベールの重要性については以下を参照: Stuart M. Persell, 'Joseph Chailley-Bert and the Importance of the Union Coloniale Francaise', *The Historical Journal*, vol. 17 (1974), pp. 176-184.
- 29) Joseph Chailley, *Colonisation de l'Indo-Chine: L'expérience anglaise* (Paris: Colin, 1892); Joseph Chailley, *L'Inde britannique: société indigène, politique indigène, les idées directrices* (Paris: Colin, 1910).
- 30) Betts (2005 [1961]), p. 43.
- 31) 平野千果子『フランス植民地主義の歴史』(人文書院, 2002年), pp. 197-200. ベッツ等に依拠しながらこの時代の同化主義批判を日本語で簡潔にまとめたものとして, 松沼美穂『帝国とプロパガンダ — ヴィシー政権期とフランス植民地 —』(山川出版社, 2007年), pp. 25-27も参照。
- 32) 小熊 (1998年)
- 33) Benedict Anderson, *Imagined Communities* (London: Verso, 1983), p. 91. [ベネディクト・アンダーソン (白石隆/白石さや訳)『定本・想像の共同体』(書籍工房早山, 2007年), p. 154] 英領インドに特徴的なのは, こうした「精神的」に「混血化」されたインド人の官吏としての登用が, ユーラシアンと呼ばれた実際に混血の人々の行政職からの排除と裏表の関係にあったということである。つまり, <イギリス人化されたインド人>が

〈インド人化されたイギリス人〉よりも優先されたのである。この点に関しては以下の拙稿を参照：Satoshi Mizutani, 'Constitutions of the Colonising Self in Late British India: Race, Class and Environment', *Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University*, vol. 38(2005), pp. 61-67, pp. 21-75 ; Satoshi Mizutani, 'Contested Boundaries of Whiteness: Public Service Recruitment and the Eurasian and Anglo-Indian Association, 1876-1901', in (eds.) H. Fischer-Tiné and S. Gehrman, *Empires and Boundaries: Rethinking Race, Class, and Gender in Colonial Settings* (New York: Routledge, 2009), pp. 88-108.

- 34) Lord Macaulay, 'Lord Macaulay's Minute. 2nd February, 1935' in W. Nassau Lees, *Indian Musalmans: Being Three Letters Reprinted from the 'Times'... With an Appendix containing Lord Macaulay's Minute* (London: Williams and Norgate, 1871), pp. 87-104, p. 102.
- 35) マコーレー主義, およびそれに先立つ「オリエンタリスト - アングリシスト論争」については以下の論考を参照：Stephen Evans, 'Macaulay's Minute Revisited: Colonial Language Policy in Nineteenth Century India', *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, vol. 23 (2002), pp. 260-281 ; Penelope Carson, 'Golden Casket or Pebbles and Trash? J.S. Mill and the Anglicist/Orientalist Controversy', in (eds.) M.I. Moir, D.M. Peers, L. Zastoupil, *J.S. Mill's Encounter with India* (Toronto: University of Toronto Press, 1999), pp. 149-172.
- 36) N. Krishnawaswamy and Laitha Krishnawaswamy, *The Story of English in India* (New Delhi: Foundation Books, 2006), p. 71.
- 37) イギリスが初等教育の責任を引き受けようとはしなかった点については日本では赤井ひさ子が論じている。赤井ひさ子「インドの教育政策：英国統治下の初等教育と初等教員養成」『東海大学福岡短期大学紀要』第5号（2003年），pp. 1-16.
- 38) Sumit Sarkar, *Writing Social History* (New Delhi: Oxford University Press, 1997), pp. 169-172.
- 39) H.H. Risley and E.A. Gait, *Report on the Census of India, 1901* (Calcutta: Superintendent of Government Printing, 1903), p. 167.
- 40) Le Bon (1896), p. 88.
- 41) *ibid.*, p. 88-89.
- 42) 東郷 (1925年), p. 211.
- 43) *CCCI*, p. 58 [Lews (1962), p. 138に引用].
- 44) Irbough (2005), pp. 75-76.
- 45) Jules Harmand, *Domination et Colonisation* (Paris: Ernest Flammarion, 1910).
- 46) Scott McConnell, *Leftward Journey: the Education of Vietnamese Students in France in 1919-1939* (New Brunswick: Transaction Publishers, 1989), pp. 9-10. Michael Adas, *Machines as the Measure of Men: Science, Technology, and Ideologies*

- of *Western Dominance* (Ithaca: Cornell University Press, 1990), p. 322.
- 47) J. Chailley-Bert, *The Colonisation of Indo-China* (London: Archibald Constable & Co., 1894) [English translation of *La Colonisation de l'Indo-Chine: L'expérience anglaise*], pp. 385-386.
- 48) Joseph Chailley-Bert, *Administrative Problems of British India* (London: Macmillan, 1910) [English translation of *L'Inde britannique: société indigène, politique indigène, les idées directrices*], p. 566.
- 49) *ibid.*, pp. 561-562.
- 50) Sir John Strachey, *India* (London: Kegan Paul, Trench, & Co., 1888).
- 51) *L'Inde* (Paris: Société D'éditions Scientifiques, 1892).
- 52) 'Preface', pp. ix-x. of Sir John Strachey, *India* [the second edition] (London: Kegan Paul & Co., 1894).
- 53) ここで詳しく論じるスペースはないが、植民地インドでのこうした教育が、いわゆる「英文学」の誕生に深く関わっていたことを Gauri Viswanathan, *Masks of Conquest: Literary Study and British Rule in India* (New York: Columbia University Press, 1989) が明らかにしている。
- 54) Strachey (1894), pp. 215-216.
- 55) McConnell (1989).
- 56) Adas (1990), pp. 324-325. アルディの教育政策については Alice L. Conklin, *A Mission to Civilize* (California: Stanford University Press, 1997), pp. 132-139も参照。ただし、こうした政策が採られたからといって、同化主義から反同化主義への歴史的シフトがあったと考えるのが早計に過ぎることを多くの研究者たちが指摘している。マーティン・デミング・ルイスによれば、アルマンによって最初に唱えられた新概念「協同主義」は同化主義にとってかわることはなく、それと曖昧なかたちで共存することになったのである [(Lewis, 1962), pp. 149-150]。
- 57) ポスト・コロニアル理論家のホミ・バーバは、「白人のようでない」ような存在様態を、精神分析およびポスト構造主義の諸概念を駆使して「雑種性」(hybridity)へと昇華させ、そこに植民地近代への抵抗性を見出す議論を展開している。この有名な〈ハイブリティティー論〉のモチーフの一つがマコーレーが提唱した「血と肌の色においてはインド人、しかし、趣味、見解、道徳、そして知性においてはイギリス人であるような階級」に他ならない。Homi K. Bhabha, *The Location of Culture* (London: Routledge, 1994), p. 97 [ホミ・K・バーバ(本橋哲也/正木恒夫/外岡尚美/阪元留美訳)『文化の場所: ポストコロニアリズムの位相』(法政大学出版局, 2005年), p. 151]。バーバによる言及は、マコーレー主義が現代のポスト・コロニアル理論にとっても大きな関心であり続けていることを示している。ただし、バーバが「擬態人間」(mimic man)としての〈イギリス人化されたインド人〉の植民地表象に着目するのは、その歴史的意味合いを考察するためというよりは、むしろ歴史学による表象(representation)を拒む「他者性」

をその曖昧な位相に見出し、それによってポスト・ヒストリカルな視座を論じるためである。そのため、厳密にいうと、ハイブリディティー論は社会経済的な背景を明らかにしようとする社会史的アプローチとは相いれない。こうしたポスト・ヒストリーを批判しながら、「バブ」の植民地的表象を歴史構造の内在批判を通じて明らかにしたのが、ムリナリニ・シンハーによる歴史研究、Mrinalini Sinha, *Colonial Masculinity: the 'Manly Englishman' and the 'Effeminate Bengali' in the Late nineteenth Century* (Manchester: Manchester University Press, 1995) である。尚、ポスト・ヒストリーを志向するものとしてのハイブリディティー論については、拙稿 Satoshi Mizutani, 'Hybridity and History: A Critical Reflection on Homi K. Bhabha's 'Post-Historical' Thought, in *Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University* (2008), vol. 41, pp. 1-19を参照。

- 58) Thomas R. Metcalf, *Ideologies of the Raj* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), pp. 105-106.
- 59) Krishnawaswamy and Krishnawaswamy (2006), pp. 63-68.
- 60) The Earl of Cromer, 'The French in Algeria', in The Earl of Cromer, *Political and Literary Essays, 1908-1913* (London: Macmillan, 1913), pp. 250-263, p. 260.
- 61) イギリスはエジプトにおいて教育を怠り、それによって現地人の「無知と隷属性」を助長した、という批判が当時イギリス人のあいだに存在した。そうした批判をかわすべく、クローマーは *Modern Egypt* において、マコーレー主義の原則はエジプトにおいても遵守された、と書いている。The Earl of Cromer, *Modrn Egypt* [New Edition] (London: Macmillan, 1911), p. 873. しかし、クローマーの教育政策が現実には意識的に反マコーレー主義的であったこと、また東郷もそれを見逃していなかったことは本稿に示された通りである。
- 62) Cromer to Strachey, April 3, 1906, PRO, FO 633/VIII, *Cromer Papers* [Robert L Tignor, 'Lord Cromer: Practitioner and Philosopher of Imperialism', *The Journal of British Studies*, vol. 2 (1963), pp. 142-159, p. 147に引用].
- 63) Donald M. Reid, 'Educational and Career Choices of Egyptian Students, 1882-1922', *International Journal of Middle East Studies*, vol. 8 (1977), pp. 349-378, pp. 355-356.
- 64) 政府による援助は少なく、学生の授業料自己負担率は1892年段階で73%であった。Sana Hasan, *Christians Versus Muslims in Modern Egypt* (New York: Oxford University Press, 2003), p. 47.
- 65) 当時台頭しつつあった国民主義者も、特に教育政策に関して、クローマーの統治方針に極めて批判的であった。Afaf Lutfi Al-Sayyid, *Egypt and Cromer* (London: John Murray, 1968), p. 86 ; Roger Owen, *Lord Cromer* (Oxford: Oxford University Press, 2004), p. 316.
- 66) Hussein N Kadhim, *The Poetics of Anti-colonialism in the Arabic Qasidah* (Leiden: Brill, 2004), p. 15.

- 67) 東郷 (1925年), p. 209 ; Chailley-Bert (1910), p. 478.
- 68) H.R. James, *Education and statesmanship in India, 1797 to 1910* (London: Longmans, Green, and Co., 1911), pp. 30-31 ; 東郷 (1925年), p. 213に間接引用。
- 69) Valentine Chirol, *The Indian Unrest* (London: Macmillan, 1910), p. 2, 東郷 (1925年), pp. 213-214に間接引用。
- 70) クローマーの植民地統治論は、東郷だけでなく帝国日本の多くの政治家・官僚・学者に影響を与えた。この点はすでに多くの研究者によって指摘されている。例えば、木畑 (2008年), p. 112, 115 ; Cemil Aydin, 'Global Anti-Western Moment? The Russo-Japanese War, Decolonization, and Asian Modernity', in (eds.) S. Conrad and D. Sachsenmaier, *Competing Visions of World Order: Global Moments and Movements, 1880s-1930s* (New York: Palgrave MacMillan, 2007), pp. 213-236, pp. 222-223.
- 71) The Earl of Cromer, *Ancient and Modern Imperialism* (London: John Murray, 1910), pp. 107-108 ; 東郷 (1925年), p. 174に間接引用。
- 72) 東郷 (1914年), p. 182.
- 73) The Earl of Cromer, 'The Government of Subject Races' in The Earl of Cromer (1913), pp. 3-53, p. 25. [筆者訳]
- 74) Le Bon (1912), p. 92 ; 東郷 (1925年), p. 158に引用。クローマーもルボンも現地人の伝統・慣習を重視する立場だったが、このふたりに加えてこの点に関して東郷に影響を与えた論者として重要なのが合衆国の国際政治学者ポール・ライシュである。『植民政策と民族心理』において、東郷は「適した教育制度が供給されるためには、その前に、各々の植民地と各々の人種の要素が、それらの特質において研究されなければならない」とライシュを参照しながら述べている (Paul S. Reinsch, *Colonial Administration* (London: Macmillan, 1912) [1st edition, 1905], p. 41 ; 東郷 (1925年), pp. 218-219に間接引用)。また、マコーレー主義に関しても、「土人をして欧州の智育の啓発に親灸せしむることにより、彼等の遺伝的思想を脱却するを得べしとの確信の上に、其基礎を置いた」ものとしてライシュがそれを批判している部分を引用している [Reinsch (1905), p. 46 ; 東郷 (1925年), p. 211に引用)。ライシュの植民思想とその背景については Brian C Schmidt, *The Political Discourse of Anarchy: A Disciplinary History of International Relations* (Albany: State University of New York Press, 1998), pp. 123-149を参照。ライシュが東郷だけでなく、後藤や新渡戸などにも影響与えており、日本人の植民地政策論を考える上で非常に重要である点に関しては、酒井哲哉『近代日本の国際秩序論』(岩波書店, 2007年), pp. 194-232を参照。
- 75) 例えば, Keyoung-Hee Choi, 'Neither Colonial Nor National: The Making of the "New Woman" in Pak Wansō's "Mother's Stake I"', in (eds.) G. Shin and M. Robinson, *Colonial Modernity in Korea* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1999), pp. 221-247. ラテンアメリカ研究では、ポスト・マルクス主義的、ポスト構造主義的な「サルタン研究」の理論的枠組みの応用をめぐって近年研究者のあいだで論争が

起こっている。(eds.) M. Morana, E. Dussel, C.A. Jáuregui, *Coloniality at Large: Latin America and the Postcolonial Debate* (Durham: Duke University Press, 2008) を参照。

- 76) 筆者が共同研究のメンバーである板垣竜太と戸邊秀明と共に執筆した英語論文は、植民地朝鮮の研究において「近代性」がいかに論じられているか、「サバルタン研究」(Subaltern Studies) との関係にも目配りしながら検討し、その問題点を指摘している。Ryūta Itagaki, Satoshi Mizutani, and Hideaki Tobe, 'The Japanese Empire', (eds.) J. Marriott and P. Levine, *The Ashgate Research Companion to Modern Imperial Histories* (London: Ashgate, 2010 [forthcoming]).
- 77) Tani. E. Barlow, 'Introduction: On "Colonial Modernity"' in (ed.) T.E. Barlow, *Formations of Colonial Modernity in East Asia* (Durham : Duke University Press, 1997), pp. 1-20, p. 6.
- 78) Leo T.S. Ching, *Becoming "Japanese": Colonial Taiwan and the Politics of Identity Formation* (Barkley and Los Angels: University of California Press, 2001), pp. 30-31.

